

## 近畿産業考古学会

The Kinki Industrial Archaeology Society

## 第133号

## 目次

1. はがね歴史記念館の見学会 (予告) . . . . . 1
2. 前ユニチカ記念館シンポジウム (予告) . . . . . 1
3. 2023 年度年次大会 (予告) . . . . . 1
4. 「JR 桜井線・駅舎の見学会」見学記 . . . . .  
. . . . . 寺島俊之 . . . . . 1
5. “JR 畝傍駅舎貴賓室付附属衛生設備”をめぐって  
. . . . . 前田裕子 . . . . . 3
6. 「前ユニチカ記念館の見学会」見学記  
. . . . . 寺島俊之, 二階堂達郎 . . . . . 4
7. 【お知らせ】尼崎市立歴史博物館 企画展「尼崎紡績  
一工都尼崎のはじまり」が開催されます . . . . . 5
8. 学会誌の電子ジャーナル公開について . . . . . 6
9. 2022 年度第 6 回役員会議事録 . . . . . 6
10. 入会者 . . . . . 6
11. 退会者 . . . . . 6

## はがね歴史記念館の見学会 (予告)

日本鑄鋼所は 1899 (明治 32) 年, 日本最初の民間製鋼所として開設され, 1901 (明治 34) 年, 住友家を買収されて住友鑄鋼場となる。同場は 1907 (明治 40) 年, 此花区 (現・日本製鉄関西製鉄所尼崎地区) に移転し, 後に住友金属製鋼所となる。1916 (大正 5) 年, 隣接地に住友伸銅所が移転, 後の住友電工大阪製造所となる。銅の精錬から始まり, 伸銅品・鋼管の製造に至る住友グループの歴史をたどる。

開催日: 11 月 1 日 (水)

集合: 阪神電鉄・阪神なんば線「伝法」駅, 13:00

主な見学先: 日本鑄鋼所跡 (伝法小学校内, 石碑), 旧鴻池本店・旧鴻池本宅 (外観), 「はがね歴史記念館」 (日本製鉄関西製鉄所尼崎地区, 展示見学)

詳細は次号でご案内します。

## 前ユニチカ記念館シンポジウム (予告)

前ユニチカ記念館は尼崎市が所有することになり, 現地での保存が実現しました。これを前提に同館をいかに活用するかをテーマとしてシンポジウムが開催されます。日本建築学会近畿支部の企画・主催による「建築文化週間」の一環として開催されます。本会は後援をします。

開催日: 10 月 22 日 (日)

会場: 尼崎市立歴史博物館

主催: 日本建築学会近畿支部, 尼崎市教育委員会

後援: 近畿産業考古学会, ひょうご Heritage 機構 H2O

阪神地区, 阪神文化財建造物研究会

詳細は次号でご案内します。

## 2023 年度年次大会 (予告)

対面とオンラインによるハイブリッド方式による開催を予定しています。見学会も実施する予定です。

開催日: 12 月 2 日 (土)

会場: 未定

詳細は次号でご案内します。

## 「JR 桜井線・駅舎の見学会」見学記

寺島俊之

5 月 27 日 (土) に頭記の見学会を開催した。JR 桜井線畝傍駅に 13:40 に集合。参加者は 22 名であった。今回の見学先は畝傍駅・帯解駅・京終駅の 3 ヶ所であり, すべて無人駅である。このうち畝傍駅貴賓室とその附属施設は通常非公開である。

上記の 3 駅を“保存と活用”の 2 項目だけに着目すると以下に分類できる。

- ・畝傍駅: 保存未定 (JR 西日本・橿原市間で協議中)
- : 活用未定 (提案募集中)

- ・帯解駅：保存確定（奈良市へ譲渡済，国登録有形文化財）  
：活用未定（奈良市・地元間で復原年代をめぐって調整中）
- ・京終駅：保存確定（奈良市へ譲渡済）  
：活用確定（奈良町観光の拠点化）

### ①畝傍駅

駅舎解体の危機に瀕している。解体保留は2025年3月まで延期されたが、耐震補強費用が高額として橿原市はJR西日本からの無償譲渡受けに難色を示している。市民団体が連携して駅舎の保存活用に取り組んでいる。

畝傍駅は民間資本による大阪鉄道によって1893(明治26)年に高田・桜井線の延伸に伴って開業した。現在の駅舎は1940(昭和15)年の皇紀2600年記念事業として造営された橿原神宮の玄関駅として和風建築で新築された。そして東京からの皇族下車駅として貴賓室や、全国からの参拝客受け入れに備えた団体待合室も設置された。

「JR 畝傍駅舎の保全活用を進める会」の米村博昭会長と「NPO法人八木まちづくりネットワーク」の平田元理事から畝傍駅舎の概要を説明頂く。貴賓室の開錠に來られたJR西日本の管理担当者も立ち会われた。

各自、プラットホームや駅舎を見学したが、メインは貴賓室であった。米村会長からお預かりした衛生設備の写真を、本会会員の前田裕子氏よりTOTO歴史資料館初代館長の山谷幹夫様に照会したところ、「小便器と洗面台は帝国議会議事堂新築時に納入された設備と同型である。また、特に大便器は戦前期の国産最高級品といえる。意匠性が高いが、おそらくは水の流し方がわかりにくい、わかっても操作しにくいいため日本では普及しなかったタイプである」とのコメントをいただいた。畝傍駅舎の衛生設備をめぐっては、前田会員からご投稿いただいたので、ご参照いただきたい。



写真1 畝傍駅貴賓室の腰掛式大便器  
(撮影：岡田広一)

時間的な制約もあり13:31発の奈良ゆき列車で帯解駅に向かった。

### ②帯解駅

13:59に到着する「帯解駅舎保存・活用の会」の木原勝彬会長に出迎えて頂く。帯解駅は1898(明治31)年築。近畿地方におけるJR路線で国登録有形文化財の認定は2例目(2022年)である。近隣に位置する南部公民館に移動して、木原様よりパワーポイントで1時間ほど下記の講演を頂く。

◇テーマ：「登録有形文化財帯解駅舎の保存・活用に向けて—地域が誇れる，市民が誇れる，全国に自慢できる駅舎づくり—」

帯解駅舎は2021年にJR西日本から奈良市に無償譲渡され、2022年に国登録有形文化財に指定された。活用法について地元と行政窓口「奈良町にぎわい課」との間で協議が行われている。

復原の年代をめぐっても市担当課と会との間で協議が行われている。市が昭和40年代当時に復原する案を提示するのに対し、会は1926(大正15)年を主張している。「私鉄が整備した明治期駅舎として貴重」(文化庁：文化遺産オンライン)とされる文化財としての価値を活かした復原と、住民主体の地域おこしに向けた活用が望まれる。

帯解駅15:28発の奈良ゆきで京終駅に向かう。



写真2 帯解駅舎で木原会長の説明を受ける様子  
(撮影：寺島俊之)

### ③京終駅

ひと駅3分まで到着した。まず目につくのは貨物跡地である。京終駅はかつて奈良市における貨物ターミナルであった。当駅も1898(明治31)年築の駅舎建築であるが2017年に奈良市に無償譲渡され、2019年に改修工事が完了した。駅舎内にはカフェや観光案内スペースが設けられ観光拠点として活用されている。

駅舎の東側には奈良安全索道の駅跡がある。同索道(1919(大正8)年～1952(昭和27)年)とは京終駅から小倉駅(旧都祁村)までを結んだ総延長16.9キロメートルの貨物専用ロープウェイであった。都祁村は天然凍豆腐こおりとうふの産地として知られロープウェイで京終駅まで搬送された。遺構として支柱の基礎部分が田原地域に存在する。

見学会は16時に京終駅で現地解散した。今回の見学会を開催するに当たり、米村博昭様、平田元様、木原勝彬様にはお世話になりました。厚く御礼申し上げます。



写真3 京終駅にて奈良安全索道のパンフレットを読む  
(撮影：寺島俊之)

## “JR 畝傍駅舎貴賓室付属衛生設備”をめぐって

前田裕子

### 【昭和戦前期の高級衛生陶器】

戦前期の日本は水洗トイレ後進国であったが、衛生陶器の製造技術に限っていうと、1920年代末頃、欧米にキャッチアップした、つまり、輸入品に遜色ない高級国産品ができるようになった。その要件はまず素地(きじ)で、溶化素地質が開発された。

それまで、日本における衛生陶器素地の主流は硬質陶器質であった。衛生器具に適しているとされたこの素地の開発にも多大な時間と労力が費やされた。しかしなおかなりの吸水性があるため、長い目でみると劣化し、汚れや臭気が付着する。その点、磁器であれば吸水性がほとんどなく、強度、硬度、耐蝕性が十分あり、色もより白くできる。反面、材料にガラス質を多く含み高温焼成するため、便器のような大物は自重で歪む。いわば磁器の長所を持ちつつも崩れない陶器素地が溶化素地質であり、もとは19世紀末、アメリカで開発された坯土調整×焼成の新技术であった。都市高層建築が増加して高品質の衛生設備が求められたアメリカでは1920年代、すでに溶化素地質の衛生陶器が標準的になっていたという。

当時の日本で溶化素地質の開発に成功したのは東洋陶器株式会社(TOTO 株式会社の旧社名、1917～1970年)と名古屋製陶所(1917～1937年。同年名古屋製陶株式会社に改組～1969年。戦前期、衛生陶器で東洋陶器のライバル企業)であった。東洋陶器が当初二度焼き(締焼→釉焼)をしていたのに対して、名古屋製陶所は最初から一度焼きを成功させ、コスト面で東洋陶器を凌駕した。

東洋陶器の二度焼きは品質重視の故ともいわれるが、実際、1930年代以降に竣工した著名な建築物では、東洋陶器の高級衛生陶器が多く設置されるようになる。その代表は帝国議会議事堂(1936年竣工、コンセプトは優良国産品の採用)で、ここに納入された東洋陶器の高級衛生陶器は実に500個近く、名古屋製陶所を始めとする同業他社の追従を許さなかった。

### 【畝傍駅舎貴賓室付属衛生設備】

殊更に議事堂の事例を引いたのは、畝傍駅舎貴賓室(1940年竣工)付属衛生設備にある小便器および洗面器

が東洋陶器製、かつ議事堂に納入されたものと同じ型式だからである。

小便器は朝顔型。トラップを内蔵した高級品である。小便器に必須のトラップだが、一体化ができる以前は金属トラップを利用していたのである。ちなみに、大型床置きのスツール便器は見かけが豪華で良いが、この時代、未だトラップを一体製造することができなかった。

かたや、腰掛式大便器は、同じく東洋陶器製だが、貴賓室とほぼ同時代に商品化されたもので、一昔前に開発された議事堂納入の腰掛式大便器をさらに高級化した、戦前期日本の最高級品といえる逸品である。時あたかも、国内向け民生品としての衛生陶器生産が縮小するなか、軍需および満洲向け需要が嘗てなく高まっていたことにも留意したい。

### 【サイフォンジェット式腰掛大便器】

そもそも、議事堂納入の腰掛式大便器は東洋陶器の画期的な高級品かつヒット商品であった。溶化素地質と共に、洗浄方式でサイフォンジェット式を採用している。

それまで、水洗式便器の洗浄方式の主流はウォッシュアウト式/ウォッシュダウン式、すなわち、単純に洗い流す/洗い落とす方式であった。サイフォン作用を利用すれば排出力を高めるのみならず、便器内の溜水を多く(溜水面を大きく)できるため、臭気の発散や汚れの付着を抑える効果がある(サイフォン式)。さらにジェット穴を設けノズルから噴出水流を加えることでサイフォン作用を強力に起こす。これがサイフォンジェット式で、もとはやはり19世紀後半のアメリカで開発された技術である。構造が複雑になるため、製作が困難であった。

### 【衛生陶器の成形技術】

戦前期、衛生陶器、特に便器のように大きくて複雑な形状のものを製作するのは難しかった。基本は石膏型を使った泥漿流し込み成形だが、構造が複雑になると型数が増える。それ以前に、原型づくりが大変だった。

泥漿流し込みというと、イメージとしては金属加工の鑄造に似ている。だが、鑄造品の原型が「完成品+削り代」であるのに対し、衛生陶器の原型は大きさ・形状共に完成品と異なる。陶器では乾燥・焼成による収縮(乾燥:約3%、焼成:約10%)や重量・形状によるたわみを計算に入れねばならず、その収縮率やたわみは均一ではない。つまり、美しいバランスの製品を作り出すための原型は歪に、完成形が平面ならば曲面が必要になる。現場作業の出発点から至難の業が要求される世界なのだ。

### 【畝傍駅舎大便器の意匠性】

話が成形技術に逸れたが、畝傍駅舎の腰掛式大便器も、むろん溶化素地質かつサイフォンジェット式である。加えて意匠性に気を配っている。便器の形もシンプルで、対になるロータンクの前/側面にレバーハンドルが無い。また、便器とロータンクをつなぐ金属管が見えないように陶器のカバーを施した(残念なことに、畝傍駅舎に残る大便器にはこのカバーが無い)。要は、素人目にもすっきりと美



しい便器なのである。

排水はタンク底に取り付けられたチェーンを引く方式である。もともと欧米では座ったまま背後にあるレバーハンドルを操作して水を流すのが基本といわれており、操作方式にはその名残が見える。が、使用者の立場（日本では使用後に立って操作するのが一般的）からすれば、あると思いついてレバーハンドルが無いと水の流し方が分からないし、下方のチェーンに気づいても操作しにくい。おそらくその理由で、この美しい便器は人気が出ず、また時代背景もあって、設置された現場はわずかに留まった——という曰く付きの便器でもある。

#### 【水栓金具】

さて、「衛生設備」としてみれば、衛生陶器のみならず、水栓金具も考慮すべきである。畝傍駅舎の金具の詳細は不明だが、とりあえず以下の指摘をしておきたい。

戦前期の日本では、この種の金具の製造技術が非常に遅れていた。よって例えば、東洋陶器も自社製品の品質に見合う金具の入手に苦労していた。その状況下、1920年代半ば以降、国産では群を抜いて高品質の金具を製造していたのがヤンソン製作所で、同所の「パイロット印高級衛生金具」は初めて国産化された高級金具として高い評価を得ていた。

東洋陶器では1930年代後半以降、衛生陶器に仕入れ金具をセットして一式納入する傾向を強めており、自社高級品にはヤンソンの金具を、普及品には相応の金具をセットして商品の差別化を図っていた。かたやヤンソンも生産量の4割を東洋陶器に納入していたという。

#### 【産業遺産として】

TOTO 歴史資料館（2007年開設。これを土台として2015年、TOTO ミュージアムが新館オープンされた）が所蔵していた近代衛生陶器は、経済産業省の近代化産業遺産に認定されている（近代化産業遺産群・続33、2008年度）。同じく衛生陶器の一部が建築設備技術者協会の建築設備技術遺産に認定されている（第4号、2012年度）。

また、パイロット印高級衛生金具も建築設備技術遺産に認定されている（第21号、2015年度）。

#### 【謝辞および参考資料】

畝傍駅貴賓室付衛生設備については、もとTOTO 歴史資料館館長（初代）の山谷幹夫様に当該設備の写真によるご判断をお願いし、加えて各々の特徴その他、貴重なご教示を多々頂きました。本稿の関係箇所は山谷様のご助言に拠っています。厚く御礼申し上げます。（なお、文責は全て前田にあります。）

参考文献：

- ・『TOTO 百年史』（2018）TOTO 株式会社。本書は電子ブックとしてWEB上に公開されています。
- ・拙著『水洗トイレの産業史』（2008）名古屋大学出版会。

#### 「前ユニチカ記念館の見学会」見学記

寺島俊之、二階堂達郎

- 開催日：【1回目】6月6日（火）参加者7名  
：【2回目】6月13日（火）参加者15名

#### ■見学

2回の見学会とも下記の2カ所を経由して前ユニチカ記念館に向かった。

##### 1. 旧国鉄福知山線尼崎支線廃線敷

敷設の主目的は尼崎港に陸揚げされた貨物の輸送であった。当初は民営による馬車鉄道として尼崎紡績とほぼ同時期に1891（明治24）年に開業したが、1907（明治40）年、国有化で官営鉄道に編入され、福知山線の支線として尼崎港駅（当時は尼ヶ崎駅）と尼崎駅（当時は神崎駅）とを結んだ。1984（昭和59）年に廃線となり、廃線敷には民家等が立ち並ぶが、阪神電鉄大物駅と尼崎駅の間付近にはレール柵に囲われた未利用地がある。



写真1 旧国鉄福知山線尼崎支線廃線跡

（撮影：寺島俊之）

##### 2. 大物川緑地

尼崎紡績は左門殿川（神崎川から分岐）の左岸に開設したが、西側を流れる猪名川水系末流の小河川・大物川からも敷地内へ水路を引き込んで水運を確保した。大物川は、尼崎城の東側から南に抜けて庄下川に合流していたが、水質汚濁のため、1970（昭和45）年に埋め立てられ、大物川緑地となった。尼崎港駅は庄下川北岸にあった。

##### 前ユニチカ記念館

2回とも13：30頃に到着。入口で、尼崎市立歴史博物館学芸員である桃谷和則様に出迎えて頂き、一階集会室に案内される。1日目は尼崎市立歴史博物館の門田真由美館長、高梨政大様、2日目は高梨様と西村豪様が同席された。桃谷様から建物の概要と保存決定までの説明を受ける。

##### ◇建物の概要

尼崎紡績本社事務所として1900（明治33）年に建設された「イギリス式」煉瓦造建築である。尼崎市内に現存する最古の洋式建築としての価値のみならず、明治30年代に建てられた煉瓦造事務所建築の現存例は全国的に希少とされる。2007年、近代化産業遺産に認定された。

1918（大正7）年、大阪市東区備後町に本店営業所が開設されたため尼崎工場事務所となる。1931（昭和6）年以降、商工団体などに貸与されたが、1959（昭和34）年、記念館として開館した。館内の間取りは建設当初とほぼ同じで、変更は1階の2つの展示室の間に間仕切り壁が設けられた

こと、玄関右側に部屋が増設されたことぐらいである。建具類は建設当初のままで、天井や壁などの内装は記念館開館の際に改装された。建設当初、各部屋がどのように利用されていたかは不明とのこと。



写真2 前ユニチカ記念館外観（撮影：若林あかね）

#### ◇保存決定まで

記念館は尼崎市管理による現地保存が2023年に決まった。ユニチカ社は2018年に創業130周年を記念した恒久保存を検討していたが、翌2019年には施設老朽化を理由に休館、2020年には解体に一転した。このため、同年、日本建築学会近畿支部・ひょうごヘリテージ機構・本会が保存要望書をユニチカ社・尼崎市・尼崎市教育委員会（本会はユニチカ社のみ）に提出。紆余曲折もあったが2022年にユニチカ社から尼崎市に建物は寄贈、敷地は購入する内容で協定書が締結され、2023年に市有地化された。

#### ◇館内見学

桃谷様の案内で館内を見学した。2階では大展示室には尼崎紡績時代・大日本紡績時代・日本レイヨンに区分して資料（約350点）が展示されている。その他、ニチボー貝塚女子バレーボールの資料展示室と貴賓室がある。1階では、世界各地のテキスタイル資料（約550点）とユニチカ歴代マスコットガールのポスターの展示室や、玄関に隣接して天皇行幸記念資料室が設けられている。

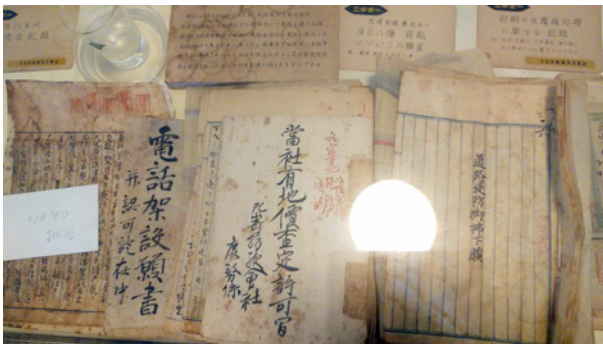


写真3 「電話架設願書」の展示（撮影：寺島俊之）

事務所の竣工前の1896（明治29）年に電話が大阪電話交換局から架設された。これによって本社工場・大阪出張所間で迅速な連絡が可能になった。

#### ◇意見交換

見学者全員による一言提案があった。なお尼崎市として以下の方針が示されている。

- ・市民の誰もが親近感を持つ施設としたい。

- ・工都尼崎の象徴としたい。
- ・具体的な活用方法は現在白紙状態。
- ・耐震補強前なので現在は一般公開していない。（主な意見）
- ・貴重な布地見本などの資料を展示し、テキスタイル向けのギャラリーとして活用する。
- ・資金確保にクラウドファンディングを活用する。
- ・文書類をデジタル化して公開する。
- ・歴史博物館と役割分担を明確にする。
- ・記念館は産業史博物館に特化し、屋外にタービン等を展示する。
- ・耐震補強の施工前は建物外側の景観整備を図り、ライトアップやガーデンコンサート等を行う。



写真4 昭和天皇行幸記念の玉座（撮影：岡田広一）

阪神電鉄大物駅まで歩き16：00に解散した。

今回の見学会を開催するに当たり、桃谷様ならびに門田館長、西村様、高梨様にはお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

※尼崎市では、旧ユニチカ記念館等の文化財の保存・活用に要する経費の財源を確保するため**尼崎市文化財保存活用基金**への寄付（ふるさと納税）を募集しています。申込み方法等については下記のサイトをご覧ください。

- ・ふるさと納税「あまがさき“未来へつなぐまちづくり”応援寄附金」

[https://www.city.amagasaki.hyogo.jp/shisei/sogo\\_annai/hurusato/index.html](https://www.city.amagasaki.hyogo.jp/shisei/sogo_annai/hurusato/index.html)

ふるさと納税の各ポータルサイトからや寄付金申込書（尼崎市立歴史博物館企画担当 TEL：06-6482-5246）による申込みもできます。

#### 【お知らせ】

**尼崎市立歴史博物館 企画展「尼崎紡績—工都尼崎のはじまり—」が開催されます**

尼崎市が前ユニチカ記念館（旧尼崎紡績本社事務所）を取得したことを記念して、同館展示資料を活用して尼崎紡績の歴史が紹介されます。

- ・会場：同館3階 企画展示室
- ・会期：9月3日（日）まで
- ・開館時間：午前9時～午後5時（入館は午後4時30分）

分まで)

・休館日：月曜日

### 学会誌の電子ジャーナル公開について

下記の9本の論文(論文, 調査報告, 講演記録)を新たに公開しました(6月末)。

- ・石垣進「南泉州における産業技術展開—紡織関係技術史—」(第5号掲載)
- ・瀬川健「桑原紡績所の変遷とその遺構」(第6号掲載)
- ・村瀬佐太美「兵庫県近代化を支えた橋梁」(第6号掲載)
- ・二階堂達郎「台湾北部における鉱山遺産の保存と活用」(第6号掲載)
- ・桃谷和則「尼崎の産業遺産と調査研究の歩み」(第6号掲載)
- ・三田村けんいち「非定型的データによる産業遺産群のクラスタリング」(第7号掲載)
- ・佐藤宏「伊東忠太氏によるモザイク壁画 新・阪急うめだ本店レストラン街に“復活”」(第7号掲載)
- ・藤本雅之「高砂線の産業遺産」(第7号掲載)
- ・角南聡一郎「奈良県における近現代の瓦生産—『奈良県風俗誌』および自治体史の分析を中心に—」(第7号掲載)

科学技術振興機構(JST)より提供された2023年5, 6月分のアクセス統計(クローラーによるアクセスを除外)の概要です。

- ・2023年5月(公開論文数:21) :  
書誌事項へのアクセス数:合計 229回  
全文PDFへのアクセス数:合計 239回  
(アクセス数が最も多かった論文:書誌事項;46回, 全文PDF;33回)
- ・2023年6月(公開論文数:26) :  
書誌事項へのアクセス数:合計 360回  
全文PDFへのアクセス数:合計 321回  
(アクセス数が最も多かった論文:書誌事項;82回, 全文PDF;62回)

### 2022年度第6回役員会議事録

日時:2023年3月29日(水), 19:15~21:10, オンライン開催

参加者:中山会長, 岡田副会長, 貝柄幹事, 寺島幹事, 二階堂幹事, 溝口幹事, 若林幹事

議事:

1. 前回役員会議事録の承認
2. 2023年度総会  
ハイブリッド方式で開催。会場:大阪くらしの今昔館, 4月15日(土), 13時30分開始。役割分担を決定。  
特別講演:和田康由氏, 研究発表:①橋本健治氏・

中尾嘉孝氏(非会員) ②若林あかね氏。

3. 2023年度総会議案書と議決  
議案は書面議決とする。会員に議案書案・ニューズレター131号を同封送付 → はがき・メール・FAXにて賛否回答(期限:4月22日)。
4. 会計監査(報告)
5. 見学会  
・堂島・蔵屋敷跡と北浜・金融街を巡る見学会:参加者数:オプション見学;20名, 本見学;21名  
・次回見学会:「畝傍」駅などJR桜井線の駅舎, 開催日:5月下旬から6月上旬。市民団体と調整。
6. 学会誌第16号掲載稿の開示  
岡田副会長より開示の要望あり。承認される。
7. 学会誌第17号原稿募集  
安田会員から提出。予定原稿:論文(査読付き)1点(中山), 講演記録2点(二階堂・貝柄, 寺島)
8. 学会誌の電子ジャーナル公開について(報告)
9. ニューズレター131号  
4月初めに発行予定。
10. 調査・研究について  
津守下水処理場:現地調査開始。
11. その他  
会長から役員会を年約2回実開催したいとの提案あり。  
次回役員会:2023年5月17日(水), 19:15~。

### 入会者

(敬称略, ◇:関心のある分野)

中尾 嘉孝(ナカオ ヨシタカ)

◇都市形成史, 日本・西洋近代建築史, 日本都市計画史

長谷川 真(ハセガワ マコト)

◇鉄道全般(特に高度成長期以前の土木構造物, 建築物)

氏野 正巳(ウジノ マサミ)

◇鉄道全般, 産業遺産, 遺構等

### 退会者

河内 晴彦(2023年度末)

2023年7月20日発行

編集 近畿産業考古学会 編集委員会

発行 近畿産業考古学会 会長 中山嘉彦

URL: <http://kinias.jp>

事務局 564-8511 大阪府吹田市岸部南2丁目36番1号

大阪学院大学 経済学部 中山嘉彦研究室気付

Tel: 06-6381-8434 (代), Fax: 06-6382-4363 (代)

E-mail: [kinias-ec@nifty.com](mailto:kinias-ec@nifty.com)

会費納入先(郵便振替)

口座番号: 00950-9-150085, 加入者名: 近畿産業考古学会